



## 談 話 室

### インターネットスクールと分析化学

日本分析化学会では、学会活動を一般の方にも広く知ってもらうため広報活動として、マスコミ向けに広報誌「展望とトピックス」が、年会や討論会に合わせて刊行されている。これは学会の予定講演の中で、比較的話題性に富む研究を選抜して、学会関係者以外の人にも分かりやすいように、イラスト入りで解説した講演要旨の小冊子である。

この小冊子を見たのか、あるいはインターネット上の本会のweb siteを参照したのか、1999年6月にNHK教育テレビの番組制作ディレクターから環境教育番組の共同制作の依頼があった。インターネットスクール「たったひとつの地球」という小学生向けの環境教育番組である。初回の電話によれば、小生らの研究「トンネル内の二酸化窒素濃度の測定」に興味を持っているという。早速、翌月の7月にディレクター氏が打ち合わせに本学を訪れた。ディレクター氏の話によれば、制作予定の番組は、午前10時から始まる教育テレビの15分番組で、神奈川県川崎市と千葉県木更津市を結ぶ東京湾アクアラインを取材し、次に小生の大学での研究と、トンネルの中の排気ガスについて調査を取材し、最後に近畿地方の阪名道路での排ガス浄化のシステムを取材する企画であった。実際の取材は、1999年8月に行われ、ディレクター氏に、カメラ、音声、照明係一行のキャラバン隊が到着。ナビゲーター役のタレントの清水國明氏も加わり、小生の研究室の院生とトンネル内や大学で一緒に測定や実験をし、それが取材されて番組として放映された。測定用の光度計がない場合とか、光度計を自作できない人のために、二酸化窒素濃度の違いで異なる発色の色見本も、番組制作の過程で、ディレクター氏と共同で作成した<sup>1)</sup>。放映後に、NHKのweb site<sup>2)</sup>を閲覧して、関心の高かった数校から質問や学校への出張依頼があった。その一つの阿南市立大野小学校へ行って支援してみると、試薬の調製や溶液の混合などの簡単な操作でも、適切な指導者がいないと間違った操作をしてしまうことが再認識された。それで詳しい実験の操作法など、あらためてNHKのweb siteに記載した<sup>3)</sup>。

その後この研究に関して、平成13年3月に再びNHKから番組制作の依頼があった。新しいディレクター氏のもと、新しいタレントの瀬戸カトリーヌさんを派遣して、小生の研究を取

材し、最後にカトリーヌさんと東京都の南砂小学校の5年生が、東京都の石原知事を訪ね、ディーゼル車問題を質問するという筋書きであった。2001年4月に放映され、この詳細はNHKの新しいweb siteに記載されている<sup>4)</sup>。

日本分析化学会と全国の小学校に、多少お役に立てたかなど、自負している。

#### 参照のURL

- 1) <http://cgi2.nhk.or.jp/tatta/2000/research/20000920/index.shtml>
- 2) <http://www.nhk.or.jp/tatta/index.html>
- 3) <http://cgi2.nhk.or.jp/tatta/2000/research/20000920/manual1.shtml>
- 4) [http://www.nhk.or.jp/tatta/2001/01pro\\_01onair/index01.html](http://www.nhk.or.jp/tatta/2001/01pro_01onair/index01.html)

[鳴門教育大学学校教育学部 村田勝夫]

## インホメーション

### 高分子分析研究懇談会第309回例会（夏期合宿）

標記夏期合宿が、7月6日・7日に1泊2日の日程で宮城県秋保温泉ホテルクレセントにおいて開催された。ここ3年夏期合宿は関東近郊で開催されており、今年は久しぶりに関東から離れての開催であったが、昨年の44名を上回る45名の参加者が得られた。また、天候を心配していたが2日目は快晴に恵まれて例会を開催することができた。

合宿1日目は14時に開会した。寺前紀夫会長（東北大院理）の挨拶の後、セッション1の講演が開始された。最初に吉田博久氏（都立大院理）が「熱-赤外分光同時測定（DSC-FTIR）による高分子の秩序化解析」と題して、示差走査熱量計と種々の分析法との組み合わせによる高分子結晶化について講演された。独自に開発されたDSC-FTIRやDSC-SRXRDを用いた高分子の詳細な構造と結晶化過程についての研究成果は興味深いものであった。2番目の村瀬篤氏（豊田中研）の講演「TOF-SIMSによる工業材料表面の有機分析」は、TOF-SIMSの歴史と特徴から始まり、接着層の剝離面の解析例、潤滑剤へのリン系極圧剤と摩擦調整剤の効果に関する研究事例と有機ELダークスポット解析事例など、企業の現場での応用まで有益な情報に満ちたものであった。3番目は浅野敦志氏（防衛大）に「固体NMR法を用いた高分子複合系のキャラクタリゼーション」と題して、<sup>1</sup>Hと<sup>13</sup>Cの緩和時間の測定から、高分子の相溶性、相分離過程、分子運動、化学反応の解析そして最近注目されているNylon-6/粘土鉱物系ナノコンポジットのモルフォロジー解析について講演していただいた。いずれも、最先端の解析事例に加えて、試料作製条件のノウハウや注意事項も聴けて有意義であった。

夕食後19時～21時までセッション2の分科会が「熱分析」、「表面分析」と「固体分析」の3グループに分かれて開催された。セッション1で講演いただいた講師の方を中心に各グ



ループでは日頃困っている問題の相談や今後の発展方向等について有益な意見交換が行われた。21時から23時まで全体の自由懇談がもたれ、その後も2次会による懇親が有志によりもたれた。

2日目セッション3の講演は9時から石田康行氏(名大院工)の「マトリックス支援レーザー脱離イオン化質量分析法(MALDI-MS)によるバクテリアの識別分析」でスタートした。昨年5月から1年間在外研究員として滞在された米国コロラド鉱山大学の紹介から、懇談会会員になじみの薄いバクテリア細胞の構成、バクテリアの培養や標準試料の作製法、識別や同定の必要性と手法、MALDI-MSによるバクテリア中のタンパク質やリン脂質分析について講演され興味深かった。

セッション4では昨日の各分科会の討議内容報告が各グループ代表から簡単になされた。

セッション5では高山 森氏(アクトリサーチ)が座長をつとめ、自由討論「高分子分析ハンドブックのここをこうしたい」と題して高分子分析ハンドブックの改訂について議論した。たたき台をもとに全体の構成、基礎編の取り扱いなどを議論し、改訂に役立つ幅広い意見が出された。英語版についても議論が行われ、出版の意義が確認されたので、費用等実現性があるか検討することになった。

12時少し前にスケジュールどおり閉会となった。講演後の質疑そして分科会での討議は活発であり、ゆったりとしたリゾートホテルを会場に、充実した2日間を過ごすことができた。

[富士ゼロックス㈱中央研究所 足立幸男]



## 第24回日本分析化学会親善テニス大会報告

会員の皆さんご存知ですか？ 会員のための親善テニス大会が年2回、分析化学討論会と年会の前日に開催されているのを！ いま、読まれているあなたも参加してみませんか？ この親善テニス大会は、日本分析化学会会員間の親睦行事の一つとして、1989年の第50回分析化学討論会(島根大)から始まり、今回の第62回分析化学討論会(信州大)の前日(5月31日)に行われたのが24回目です。いつも午後1時頃から5時過ぎまでテニスを楽しみ、そのあと場所を移して懇親会となります。

今回は長野県松本市浅間温泉庭球公園が会場に予定されていましたが、前日から当日早朝まで降り続いた雨でテニスコート

が使用できず、急きょサンピア松本(篠ノ井線で松本駅から二つ目の村井駅)に会場を変更してどうにか開催できました。

私自身、雨の中、「松本は昼から晴れる」と信じつつテニス道具を持って新幹線に乗り込むも、乗り継ぎ地の名古屋ではまだ雨が残り、松本へ向かう途中の山の中での霧雨に気を揉み、空を見上げては「昼から晴れて」と祈り続けながら列車に揺られて行ったわけですが、願いが通じたのか、松本駅のホームに降りるころには、太陽が雲の合間から見えるまでに回復し、テニスができると思いつつ急いでタクシーで浅間温泉庭球公園へ駆けつけました。会場にはすでにTR大のN先生と大学院生7名及びF大のY先生をはじめ先生3名と大学院生1名がすでに来ていましたが、いつもなら12時過ぎであれば皆さん着替えてウォーミングアップをしているはずなのに、観客席に座ってコートボーッと眺めていました。コートはクレーコートで少し水が溜まっているけど整備したら使えるような状態でしたが、管理の人に「自分たちで整備するからなんとか使わせて下さい」とお願いをしても、「今日はすでに使用禁止と決定しているからダメ」とつれない返事の一言とのこと。そこで、行動派のY先生はいつものように「それならば、この近くで使えるコートを探そう」と、あちこちに電話をかけ、ついにサンピア松本のコートを見つけられました。私たちは浅間温泉庭球公園に会場変更の張り紙をして、約1時間かけて移動しました。サンピア松本には、会場変更の張り紙を見て次々に参加者が集まり、最終的にはコート2面を借りて14名でダブルスを楽しむことができました。もともとは30名弱の参加予定でしたが、車で約1時間も離れた所への会場変更という特殊な状況の中での14名の参加とは、本当にテニス好きの人の集まりで、我ながら半分ぐらいあきれています。

通例、このテニス大会への参加者は年齢も幅広い(今回は最年長73歳から最年少23歳)けれど、腕もピンからキリまで、全日本経験者から初心者、中学時代からやっている人から40歳過ぎて始めた人、スクールなどで基礎から習った人から我流で押し通している人と様々ですし、参加歴も24回連続参加(3名)から初参加(2名、懇親会を含めると9名)まで様々という状況です。また、連続参加者の中にはこのテニス大会だけでしかテニスをされない先生もいます。試合形式はダブルス(6ゲーム先取)で行いますが、腕はまず自己申告で、ペア(ペアは固定ではない)や対戦相手はその場で適当に決めて決まります。状況を見て、自分と同じくらいの腕の持ち主と対戦したり、強弱ペアでやったりとこれまた様々です。

